

フィリピン・コルディレラ山地社会の「アメリカ化」と イゴロットの対日協力問題

芹澤隆道*

“Americanization” in the Cordillera Mountain Societies of the Philippines and the Igorot Collaboration Issue with Japan

SERIZAWA Takamichi*

Abstract

The issue of Filipino political collaboration under Japanese occupation (1941–45) has evoked several controversies within Filipino and American scholarship. The former has dwelt on the issue of patriotism while the latter has focused on the wartime resilience of the oligarchic elite. This paper rethinks those issues with a particular focus on “Americanization” in the Cordillera Mountain Societies of Northern Luzon. The indigenous residents in that area were generally called (and officially termed) “Igorot” during the American colonial period. Under the name of “benevolent assimilation,” Igorot intellectuals collaborated with Americans and their lowlander counterparts in order to modernize their societies, which ultimately led to further discrimination as well as exploitation by their “developed” patrons.

During the Japanese Occupation, a group of the Mitsui Mining Company was able to mobilize Filipino workers and conduct copper mining at Mankayan located in the southwestern part of the Mountains. As revealed in Mitsui’s memoirs edited in 1974, the group’s operations could not be handled without depending on the former colonial relationships at the mining sites. The Japanese friendship narrative with the Filipinos was also the product of ethnic tension between lowlander and Igorot created by American colonial policy. On the other hand, local accounts showed that the reason behind Igorot intellectuals’ collaboration with Japan as well as resistance to it was the desire to modernize, a pattern first found during the American colonial period. In conclusion, I show the contradictions of “Americanization” in Igorot societies, which led to both emancipation and repression during the Japanese Occupation.

Keywords: Americanization, benevolent assimilation, mining, resistance against Japan, collaboration with Japan, Igorot

キーワード：アメリカ化、恩恵的同化、鉱山開発、対日抵抗、対日協力、イゴロット

* Department of Southeast Asian Studies, Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore, AS3, 3 Arts Link, #06-05 Singapore 117570
e-mail: serizawa.takamichi@gmail.com

はじめに

アメリカ人とフィリピン人の研究者は、日本占領下でフィリピン人政治家たちが行った対日協力について、それぞれの見解を著しく対立させてきた。両者の争点は、対日協力を、政治家の自己保全や縄張り闘争と理解するのか [Steinberg 1967; McCoy 1980]、あるいはフィリピンの被害を最小限に食い止めた救国的行為として理解するのか [Malay 1967; Agoncillo 1984; Saulo 1991; ホセ 1993]、にある。換言すれば、アメリカ人研究者は、対日協力という行為に、フィリピン政治の前近代性や寡頭政治像を見出してきたのに対し、民族主義的な立場からフィリピン人研究者は異を唱えてきた。¹⁾ 一方、日本人研究者も一定の関心を払ってきたが、この対立には積極的に介入することなしに、対日協力の傀儡的性格を明らかにしてきた [池端 1975; 中野 1989; 川島 1996; 寺見 1996; 荒 1999]。

対日協力問題にまつわる米比の研究者の対立点、および日本人研究者の非介入は、次のような政治的背景と密接に結びついているだろう。日本の敗戦と共に、アメリカ合衆国はフィリピンに対する影響力を復活させた。戦後復興を行う経済的な恩恵をフィリピンに与えることと引き換えに、合衆国は対日協力者の責任を追及するように圧力をかけた。この責任追及の対象には、政治家のみならず、軍事協力や経済協力を行った一般人も含まれていた。1945年9月に対日協力者を裁くための「特別裁判」法がフィリピン議会で成立した。とはいえ起訴された協力者が膨大な人数に上ったこと、予算や人員の欠乏、証言のあいまいさなどによって、合衆国が望んだような成果を上げることができなかった [寺見 1996: 87-89]。

対日協力者の責任の全貌を明るみに出すことはできなかったが、この追及が、1946年7月4日のフィリピン独立と同時進行したことを見過ごすべきではない。つまり対日協力者を審問する中で実現したこの独立は、合衆国からの自立というよりも、改めて両国の友好関係を確認するという意味合いが強かったからである。

この一連の出来事を、合衆国が日本の帝国主義からフィリピンを救った「解放」と捉えるのか、あるいは合衆国によるフィリピンの「再占領」と捉えるのか、米比の研究者の間で見解が分かれてきた。対日協力者に関する両者の争点も、この文脈に位置づけて理解することができる。すなわちアジア各地で暴力を振るった日本の帝国主義に協力したフィリピン人の性格を批判することがアメリカ人研究者の課題となり、対日協力者に対する合衆国からの非難をかわし、その行為に民族主義を見出すことがフィリピン人研究者の課題となった。一方、日本人研究者

1) この対立は、フィリピン革命をめぐるフィリピン人研究者とアメリカ人研究者の対立とも通底している。論争の内実については、Ileto [2001] と永野 [2000] を参照。

は、「大東亜戦争」がフィリピンにもたらした甚大な被害を鑑み、終戦からフィリピン独立までの出来事を、再占領とも解放とも評価することのできない葛藤を抱えたのであろう。このあいまいさは、フィリピン人の対日協力に関して、傀儡という以上に踏み込んだ見解を提示できなかった限界を反映している。

対日協力問題に関する有力説として、欧米人と日本人研究者に最も影響を与えてきたのは、上記のアルフレッド・マッコイ (Alfred McCoy) の論稿である。彼は、パナイ島イロイロ州を事例に、政治エリートが、対日協力か、対日抵抗か、という対立軸ではなく、戦前の派閥闘争に基づいた抗争を展開した点で、日本占領は同地の社会構造に根本的な変化を与えなかったと論じた。ここで言われる政治エリートとは、スペイン植民地期の有産階級であったカシケ (Cacique) と呼ばれる地主層である。彼らは、アメリカ植民地期に導入された議会制民主主義を通じて、地方代表者として中央政治へと参加し、その権力基盤をいっそう強めた。そして日本占領期においても、地方エリートたちは民衆を動員し、日本軍政に加担したと位置づけられている。このマッコイの議論は、それまで定説として受け入れられていた Benda [1958; 1972] の変化説——東南アジア諸国の民族主義を高揚させ、宗主国からの独立を加速させた日本占領——に対して、連続性に重点を置いた視点から再考を促した。

マッコイによれば、イロイロ州の政治エリートにとっての戦線は、対日協力と対日抵抗の間にあったというよりも、両勢力に人員を送り込みながら、それぞれの陣営内で対立したライバルとの間にあった。戦前、彼らの対立は、アメリカ人によって教え込まれた民主主義によって暴力行為に発展することはなかった。しかし 1942 年 5 月の在極東米国陸軍 (USAFFE, 以下「ユサフェ」と表記する) の日本軍への全面降伏後、イロイロ州の政治エリートはアメリカ人から抑制されることがなくなった。日本占領下で政治家たちが殺害行為にまで関与したのは、西洋的な民主主義がしっかりと根付かなかったからである [McCoy 1980: 233-234]。

先行研究であったスタインバーグに比べて、マッコイの研究は、フィリピン人エリートのアメリカ合衆国への忠誠についてやや懐疑的である。つまり彼らの忠誠が確かなものであったら、アメリカが教えた民主主義が定着したはずだからである。とはいえ「フィリピン人のアメリカ合衆国への忠誠」は、両者の議論の前提になっている。

「アメリカ合衆国に忠誠を持つフィリピン人」は、フィリピン人歴史家テオドロ・アゴンシリヨ (Teodoro Agoncillo) の著作でも強調されている。自身の体験も織り交ぜながら日本占領を論じた『運命の歳月』の結語は、スペイン、アメリカ、日本の三者の支配を経て、フィリピン人が選んだのは、民主主義と個人の尊厳の重要性を説いたアメリカへの忠誠だった、となっている [Agoncillo 1965: 921-923]。

他の東南アジア諸国の場合と比べて、フィリピン人の対日協力が大きな論争となってきた理由も、ここに求められることができるかもしれない。つまりアメリカ人研究者とフィリピン人

研究者は、「アメリカ合衆国へ忠誠を持つフィリピン人」という前提を共有してきた。その上で、対日協力という行為に「裏切り」や「寡頭政治家」を見出すのか、あるいは「自己制御」や「愛国主義」を見出すのか、見解を対立させてきた。

そもそも問の出発点に、アメリカとフィリピンの非常に親密な関係が刻み込まれていた。フィリピン人歴史家レナート・コンスタンティーノ (Renato Constantino) は、この特別関係を断ち切ることで、「フィリピン人のアメリカへの抵抗」を呼び醒まそうとした。民主主義と利他主義の名の下に行われた合衆国の植民地諸政策は、植民者と被植民者という関係を見えづらくさせ、フィリピン革命で得たフィリピン人としての自覚を喪失させる「非フィリピン人化」の過程であった [Constantino 1974: 40-42]。新世代の指導者たちは、合衆国が導入した学校教育、インフラ整備、官僚制度を通じて、植民地支配制度のなかに取り込まれていった。コンスタンティーノは、日本占領下の抗日ゲリラ・リーダーであっても、植民地体制の崩壊を必要とする自覚が足りなかったため、その抵抗活動は、合衆国によって再び庇護され、独立を与えられるための闘いであった、と述べる [R. Constantino and L. Constantino 1978: 132-138, 148-150]。

ここに挙げたコンスタンティーノのアメリカ批判は、近年のフィリピン人歴史家たちが行っている「植民地言説」研究に脈々と受け継がれている。彼らはアメリカ植民地期の教科書編纂、衛生対策、センサス実施などを取り上げながら、一連の「恩恵的同化」政策が「白人の父を仰ぐように」指導したアメリカ植民地主義のイデオロギーになっていた問題を解き明かしている。²⁾ アメリカ植民地主義のイデオロギーが問われないまま、カシーケ論³⁾がフィリピン政治史の有力説として今日に至るまで参照されている理由として、レイナルド・イレート (Reynaldo Ileto) は、欧米研究者がオリエンタリズムに囚われ続けている問題を提起した [Ileto 2001]。このイレートの批判に対して、Lande [2002] と Sidel [2002] は反論を寄せたが、他の欧米人研究者の近著では引用されない場合が多く、議論が進展しているとは言い難い。一方、日本人のフィリピン史研究者たちは、この批判を受けとめ、従来のフィリピン史像の刷新を試みている [永野 2003; 中野 2007; 岡田 2009; 藤原・永野 2011]。

とはいえ先述したように、日本占領期に関して、日本人研究者の間ではマッコイのカシーケ論が依然として定説となっている。確かに日本占領は、アメリカ植民地期の統治体制と政治エリートを温存したので、カシーケの連続性を指摘することは可能である。本稿で取り上げるルソン島北部コルディレラ山地のマンカヤン銅山開発においても、このマッコイの議論の枠組みを継承して、日本の軍政と既存の現地有力者が結託した強制動員が指摘されてきた [上田

2) その議論の大筋を窺い知ることのできる日本語訳書として、イレート他 [2004]。なお同訳書の書評論文として芹澤 [2006]。

3) たとえば Karnow [1989], Anderson [1995], May [1987; 1996]。

1990: 157-164; 池端 1996a: 166; 小林 1997: 116-117]。⁴⁾

しかし「アメリカ植民地言説」研究が、アメリカ植民地主義を鋭く問い直す視座を提供しているならば、さまざまな点でアメリカ植民地主義を引き継いだ日本占領についても、従来の見解を問い直す衝撃を持っているのではないだろうか。とくにコルディレラ山地社会の場合、スペイン植民地期は「未開」であり、アメリカ植民地期になって「開拓」させられた事実を見過ごすべきではない。鉱山資源に関しても、アメリカ人資本家、技術者、弁護士の介入によって、大規模な開発が始まった。この点で鉱山産業が、スペイン植民地期のプランテーションに端を発する砂糖、タバコ、麻などの産業と異なるのは、カシーケの不在である。誤解を恐れずに言うならば、フィリピン人ではなく、「アメリカ人というカシーケ」によって鉱山産業は展開された。西部開拓時代に行われたネイティブ・アメリカンの土地の奪取やカリフォルニアのゴールドブーム時の開発が、コルディレラ山地の「前例」となっていた。タイトルに挙げた「アメリカ化」は、アメリカ流の統治手法によって、アメリカが理想とする「社会」がコルディレラ山地にいかに作りだされたのか、を示している。

本稿がまず注目するのは、コルディレラ山地の先住民社会が、この「アメリカ化」によって、いかなる変容を迫られたのか、ということである。同地の先住民の呼称は、アメリカ人による民族学調査を経て、「イゴロット」と定着していった。なぜアメリカ植民地主義は、互いに異なる言語、慣習を持つコルディレラ山地の「部族」を「イゴロット」に統括する必要があったのか。この識別は、アメリカ植民地主義が推進した鉱山開発とどのような関係にあったのか。これらの問いをI章で展開する。

日本占領期に三井鉱山は、アメリカ人に代わって、コルディレラ山地南西部に位置するマンカヤン銅山の開発体制を引き継いだ。日本軍政部が計画したフィリピン各地の鉱山開発は、40件以上に上ったが、現地社会から激しい抵抗に遭い、ほとんどが「失敗」した。その中で三井鉱山は、異例の「成功」を収めたという [池端 1996a: 154-160]。フィリピン人研究者は、この三井鉱山の「成功」について、日本占領期においても鉱山開発の発展を妨げなかった、という点で肯定的評価を下している [Lopez 1992: 168; Bagamaspad and Hamada-Pawid 1985: 289]。

1974年に三井鉱山の社内誌として刊行された『三井金属修史論叢 別冊第1号 マンカヤン特集』でも、マンカヤン銅山の「成功」談義が語られている。⁵⁾ 日本人28人、フィリピン人4

4) 倉沢 [1992] は、ジャワ島の事例から「ロームシャ」という言葉に象徴される過酷な労働実態を明らかにし、日本占領期東南アジア研究に多くの示唆を与えた。なお日本占領の社会史として知られる Agoncillo [1965] と Hartendorp [1967] においても、一般民衆の動員に関しては断片的な記述しかなされていない。

5) マンカヤンに続き、ビルマ北部のボードウィン鉱山開発の回想録も刊行された [三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局 1976]。ボードウィンでは、たびたびの空襲被害や労働者の動員失敗によって、経営実績を上げることができなかったため、同資料では「悲愴な思い出」や「僚友の冥

人の思い出が寄せられた同回想録は、他のフィリピン出兵した旧日本兵の回想録と比べて、フィリピン人とのさまざまなエピソードが盛り込まれている。異境の地で開発を行う以上、現地との連携や交渉が必要だったからであろう。いかに多くの現地人——とりわけイゴロット——の協力を得ることができたのか、についても数多く言及されている。イゴロット・エリートの中には、日本軍政に積極的に協力を行った人々もいた。彼らの対日協力は、いかなる動機に基づいていたのだろうか。II 章では、三井鉱山の回想録と近年刊行された当該社会のゲリラ活動誌 [B. Marines and C. Marines 2010] とを照らし合わせながら、イゴロットにとっての対日協力と対日抵抗の意味に迫りたい。

なお日本人移民男性、および彼らと現地女性との間に生まれた日系二世の対日協力問題については、調査が不十分なため本稿では言及しない。⁶⁾

I アメリカ植民地期の鉱山開発と現地社会の葛藤

本章では、米比戦争後のアメリカ植民地体制下におけるコルディレラ山地の鉱山開発を、イゴロットと呼ばれる山地民の呼称の変遷に即しながら素描する。なおイゴロットは、フィリピン・ルソン島北部の言語で「山の民」を意味している。

今日にいたるまで「イゴロット」にまつわる一般的なイメージは、「首狩り」「食犬」「ふんどし」「ガンサ音楽」など概して「野蛮」な印象が強い。とはいえコルディレラ山地とその裾野に位置する沿岸部低地との関係を整理したパトリア・アフアブレ (Patricia Afable) によれば、スペイン植民地期には、さまざまな交流や類似した習慣があり、山地と低地の民族的境界は明確ではなかった。限られたルートを通し、物と人の相互交流が行われていたからである [Afable 1998: 85]。

16 世紀のスペイン植民地支配開始以降、布教と貴金属資源を目的にしたスペイン人が、たびたびコルディレラ山地へ入植を試みた。しかし多くの場合、激しい抵抗に遭い頓挫した。そのためスペイン人は、沿岸部に住む人々を徴兵しながら、コルディレラ山地の制圧を目指した。沿岸部低地に住むキリスト教徒を指すイロカノ (Ilocano) と山地の「野蛮者」を指すイゴロットという区分が設けられ、軍事作戦のプロパガンダで用いられるようになった [ibid.: 90]。

本稿で扱うマンカヤン銅山が位置するコルディレラ山地南西部ベンゲットは、元来「カンカナイ」(Kankanaey) と「イバロイ」(Ibaloy) と呼ばれる人々の居住区域であり、単純な精錬

⁶⁾ 福が主題になっている。この点で、経営がある程度成功したのか、しなかったのか、その結果が回想録の語りを大きく規定しているといえる。

6) 1939 年時点高原都市バギオに 1,000 人ほどいた。日系移民史については、早瀬 [1989; 1996] と Afable [2004b] を参照。

によって粗金が生産されていた。この金は、貨幣や装飾品として、イロカノとの生活必需品の交換、あるいは陶磁器を輸出する中国大陸との貿易において流通していた。こうした外部社会との交流を行ってきたイバロイの人々の間で、他の「部族」に先立ち、19世紀末から自称としての「イゴロット」が用いられていたという [ibid.: 91-92]。

20世紀初頭にアメリカ合衆国による植民地支配が始まると、コルディレラ山地で生活する人々の自他認識は、社会経済関係の変化に伴い大きな転換を迎えた。アメリカ植民地政府は、スペイン人による無計画で単発的な資源奪取と異なり、伝統的な鉱物交易を廃絶し、官僚制度と分業体制に基づいた大規模な資源開発を図った [Lopez 1992: 6-12]。

1901年10月、アメリカ植民地政府下に非クリスチャン部族局 (Bureau of Non-Christian Tribes) が設置され、コルディレラ山地やミンダナオ島にて民族学調査が行われた。この調査の大きな目的は、各「部族」間の言語、慣習の類似性を発見しながら、氾濫していた「非クリスチャン部族」名を一般化することにあった。同局長官デービッド・バロウズ (David Barrows) によれば、フェルディナンド・ブルメントリット (Ferdinand Blumentritt) やイエズス会が行った先行調査は、間違いが多く含まれており、結果として「非クリスチャン部族」名が膨大な数に上ってしまったという。バロウズたちは2年間にわたり実地調査を行い、より一般的と考えられる16個の「非クリスチャン部族」名に、現地社会および先行研究で用いられていた110個の部族名を統括した [Barrows 1905: 467-468]。

バロウズの調査報告は、植民地における立法と行政機関を担った第2次フィリピン調査委員会が出版したセンサスに掲載されている (以下、『1903年センサス』と表記する)。同報告は「クリスチャンあるいは文明化された部族」(Christian or Civilized Tribes) と「非クリスチャンあるいは野蛮な部族」(Non-Christian or Wild Tribes) という大きな二分法を用いているが、本稿に関わる範囲で該当民族を挙げると、前者はイロカノ、パンガシナン、タガログであり、後者はイゴロットである。なおコルディレラ山地における24個の「部族」名が、イゴロットとして一括された [ibid.: 468-477]。⁷⁾

ここから窺えるのは、「クリスチャンあるいは文明化された部族」に関しては、スペイン植民地期のカテゴリと対象民族 (地域) の関連性がそのまま持ち越されたが、「非クリスチャンあるいは野蛮な部族」に関しては、現地社会や先行研究で使われていた数々の「部族」名が、

7) 24の部族名を以下抜粋する。なお括弧は、地名を指している。Alamid (Nueva Vizcaya), Apayaos, Ayangan (Nueva Vizcaya), Banao, Bunnayan (Nueva Vizcaya), Calingas (Isabela), Catalanges (Isabela), Dadayag, Ecnig (Lepanto-Bontoc), Epocao or Ipucao (Lepanto-Bontoc), Gaddanes or Gaddang (Isabela), Ifugao (Isabela), Igorrotes (Ilocos Norte, Pangasinan, La Union), Infieles (Ilocos Sur, Pangasinan), Ipukao (Lepanto-Bontoc), Isanay (Nueva Vizcaya), Isinac (Nueva Vizcaya), Isinay (Nueva Vizcaya), Itneg, Kalibugan (Isabela), Kalingas (Cagayan), Mayoyao, No Cristianos or Igorrotes (Benguet), Nuevos Cristianos (Pangasinan)。

「イゴロット」というカテゴリーに一括されたことである。コルディレラ山地の「部族」名が氾濫していた理由として、バロウズは、彼らの政治単位が村のまま留まっており、谷を越えた村はすでに敵の村で、隣同士で首狩りを行ってきたからである、と述べる [ibid.: 453-454]。つまり、それぞれの「部族」名を包括する「イゴロット」という民族名を確立することによって、「野蛮」な社会に政治的な統一をもたらそうとした。

アメリカ植民地主義はフィリピン占領の際に、「恩恵的同化」(Benevolent Assimilation) と呼ばれる政策方針を掲げ、フィリピンが自立できるまでアメリカ合衆国は「後見人」となるという大義を立てた [Miller 1982: 52]。コルディレラ山地における「恩恵的同化」は、フィリピン調査委員会の主要メンバーであり、非クリスチャン部族局の調査にも深く関与したディーン・ウースター (Dean Worcester) の理念に代表される。彼はコルディレラ山地社会の統一を達成するために、非クリスチャン部族と低地民を分離する政策を採用した。ウースターは、「狡猾」な低地民から、非クリスチャン部族は「騙されてきた」と考えていた。そのためアメリカ人植民地官僚たちが直轄することによって、低地民との交流を制限し、アメリカ式のルールを覚えさせようとした [Finin 2005: 36-40]。

しかしこの分離政策は、米比戦争の終結宣言後も、ねばり強いゲリラ戦を続けたフィリピン革命勢力の鎮圧手段と結びついていたことを見逃すべきではない。Rafael [2000: 25-26] と永野 [2001: 141-142] は、1903年から1905年にかけて行われたセンサスが、フィリピン革命勢力の鎮圧手段と巧妙に結びついていた事実を指摘する。コルディレラ山地においても沿岸部低地から逃走してきた「レモンタードス」(Remontados) と呼ばれる抵抗活動勢力がいた。山地での戦闘は、そこで暮らす人々の知識に頼るところが大きく、山地に暮らす人々はフィリピン革命勢力とアメリカ軍部隊の双方から動員を要求された。諜報活動、荷物運び、道先案内人、あるいは「ボロの男たち」(Bolo Men)⁸⁾ として戦闘に加わったが、革命勢力からもアメリカ軍鎮圧部隊からも、その機動性の高さやネットワークの広さから、スパイ容疑をかけられ易く、拷問や殺害の対象となった [Scott 1986: 80-83]。後述するように、日本占領期においても、山地の人々は類似した経験をすることになる。

『1903年センサス』が、コルディレラ山地の非キリスト教徒を全て「イゴロット」とカテゴリー化したのは、革命勢力という「危険」なキリスト教徒である低地民から、「非クリスチャン部族」だけでなく、アメリカ人を「保護する」という目的も含まれていた。ウースターは「文明化された近隣の低地民と比べたら野蛮ではあるが、はるかに穏やかで無害なイゴロット」が住んでいるベンゲットに、マニラから首都機能を移転することを画策していた。自然の要塞

8) 「ボロ」とは、男たちが腰にぶら下げた小刀で、農作業や家事などの日常生活で欠くことのできない携帯品である。

である高地は、反乱勢力に対する防御に適していたからである [Sullivan 1991: 146-147]。首都機能の完全移転は行われなかったが、アメリカ植民地政府は、スペイン人によるキリスト教布教が成功し、低地民と高地民の交易中心地となっていたラ・トリニダッドに隣接した小さな村バギオを夏季の間の行政都市（サマーキャピタル）と指定した。センサス実施と同時の1903年、マニラ-バギオ間の移動効率を上げるためのベンゲット道路建設が着手され、アメリカ人にとっての「安全地帯」がコルディレラ山地に作り出された。⁹⁾

『1903年センサス』の目的には、同地における鉱物資源の情報収集や地質調査も含まれていた。「地理部門」では、山地南西部に金と銅資源の豊富に埋蔵されている可能性が高いこと、同地に住む「イゴロット」の技術では十分に開発できないこと、アメリカ人が開発申請を出し始めているが、労働力と輸送問題が障害となっていることなどが指摘されている [Census of the Philippine Islands: 1903, Vol. 1: 81-84]。

1902年7月フィリピン平定作戦の終了が、アメリカ合衆国政府によってなされた後にも——ねばり強い抵抗活動は続いていたが——、現地に留まり続けたアメリカ人兵士たちがいた。彼らの中には、カリフォルニアのゴールドラッシュ時の一攫千金を夢見て、比米戦争に有志参戦した人々がいた。アメリカ植民地政府は、植民地の経済発展を達成するために、ホームステッドやトレンス・システムといった自由なビジネスや事業を保障する本国の手法を踏襲した [Salamanca 1968: 131]。「無主の土地」の開拓を推進する政策は、西部開拓時代にネイティブ・アメリカンを「祖先の地」から引き剥がす「資源囲い込み」にほかならなかったが、コルディレラ山地においても同様の事態が起こった。

アメリカ人による開発、投資を促すために、1902年アメリカ議会で成立したフィリピン組織法 (Organic Act) は、鉱物資源の私的所有を前提とした開発方針を定めた [Lopez 1992: 49, 61]。アメリカ合衆国がフィリピンの鉱山開発に重点を置いた事実は、同法全88条のうち42の条文が鉱物資源とその土地に関わっていることから窺える [Habana 2001: 10]。第21条は、フィリピン諸島とアメリカ合衆国市民は公有地における鉱物資源を自由に開発、所有、購入できることを明記している [Wirkus 1974: 28-29]。

鉱物資源の豊富なコルディレラ山地南西部の先住民社会では、各々の共同体を統括するバクナン (Baknang) と呼ばれる首長とその一族が、広大な土地を「所有」していた。とはいえ彼らの第一の財産は牛であり、土地そのものに価値が見出されていたわけではない。アメリカ統治が実施したのは、土地の区画化と個人所有という原則であった。アメリカ流のシステムを受け入れることによって成功を収めた首長もいたが、多くの場合、徴税に対する嫌悪から彼らは土地登録を拒んだ。その結果、彼らの土地は公有地として没収され、アメリカ人が自由に開発

9) ベンゲット道路工事に関わった日本人移民労働者については、早瀬 [1989] を参照。

できる対象区となった。長年自分の家族が採鉱してきた土地を、なぜ2本の杭を打つだけで、見知らぬアメリカ人が奪っていくことができるのか、先住民たちの間では理解できなかったという。首長はクランを維持できず、構成メンバー（親族、奴隷）は生活基盤を失った。人々は生存手段を確保するために、金山開発に伴う道路、橋の建設作業、岩屑の運搬作業などの非熟練労働者へと転換していった [Bagamaspad and Hamada-Pawid 1985: 212; Habana 2001: 10-14]。¹⁰⁾

初期の鉱山開発は、アメリカ人の個人投資家や経営者が主導したが、世界大恐慌の影響を受けて、1930年代に入りフィリピン・ゴールドブーム¹¹⁾が到来すると、鉱山産業は飛躍的に発展し、砂糖産業に次ぐフィリピン第2位の地位を占めるようになった。コルディレラ山地の金山開発の企業数は、1929年までは5社であったが、ゴールドブームに煽られて、その数は1934年までに52社、1938年までに136社が新たに参入した。雇用者数も、1934年の6,850人から、1938年には3万6,104人へと5倍強に増加した [Wirkus 1974: 186, 211]。

1937年のコルディレラ山地における鉱山企業の雇用者の民族・出身別統計では、キリスト教徒フィリピン人とイゴロットという識別が使用されており、前者がおよそ69%、後者がおよそ31%を占めている。69%のキリスト教徒フィリピン人のうち、46%がパンガシナン、20%がイロカノとなっていることから、沿岸部の低地社会から多くの人々が鉱山企業に就職したことが分かる [ibid.: 190]。職種別に見ると、経営陣はアメリカ人が占め、識字能力のある低地民は監督者、事務職、技術職などに配属され、識字能力のない低地民と高地民は、道路、坑道建設、運搬作業など非技術職に配属された。中間管理職として雇用された低地民は「現地住民監督」(Native Capatazes)と呼ばれ、英語と現地語（主にイロカノ語とタガログ語）をあやつり、経営陣と労働者とを仲介した。この「現地住民監督」は、出身地ごとに、同郷の非熟練労働者たちを取りまとめる「親方」の役割を担い、分業体制が作り出された [Chamber of Mines of the Philippines 1940: 48]。1930年代における「現地住民監督」の平均日当は2~5ペソ、非熟練労働者の平均日当は0.8~1.4ペソであり、賃金にも格差が設けられた [Lopez 1992: 124]。

ここから窺えるように、コルディレラ山地の先住民たちは最低辺の賃金労働者として雇われていた。とりわけアメリカ人たちが積極的な鉱山開発を行ったカンカナイとイバロイの先住民社会の間で、アメリカ流の教育を受け、読み書きや英語の能力を身につければ、多くの給料を

10) 早瀬 [2003: 121-141] は、同じく「非クリスチャン部族」と分類されたミンダナオ島イスラーム社会の首長制も、アメリカ植民地主義によって解体させられたことを指摘している。

11) フィリピンでゴールドブームが始まるのは、1933年フランクリン・ルーズベルト大統領が米国の金本位制を中止し、1オンスあたりの金価格を20.67ドルから35.00ドルへ引き上げてからである [Lopez 1992: 74]。

もらい、また新しい時代のリーダーになれるという見込みが急速に広まっていったという [Habana 2001: 18]。

鉱山開発の現場では、コルディレラ各地から集まった労働者たちが、飯場での共同生活、イロカノ語の基本単語の習得、低地民への対抗意識を通じて、「イゴロット」としての一体感を深めていった。また鉱山会社は、「部族」間の紛争が始まると、多くの場合、その村と関連している労働者を一時解雇した。この一時的な強制解雇は、作業現場での「部族」間の摩擦を減らし、イゴロットの労働者が互いに協調していくための強力な動機になった。アメリカ人から成る経営陣にとっても、この統一は作業を円滑に進めるために有益であった。生産性や安全性を高めるために、イゴロット組と低地民組とに分けて競争させたからである [Finin 2005: 61, 98-100]。

イゴロットとしての連帯が高地民の間で高まりつつあったが、1935年に誕生したコモンウェルス政府（独立準備政府）は、「祖先の土地」の返還を要求するイゴロットに対して、ほとんど改善策を講じなかった [栗田 2005: 144-147]。むしろゴールドブームの最中に誕生した同政府は、私有地の資源にも介入することによって、大幅な税収の増加を図った。¹²⁾ 1936年、同政府は鉱山資源の保護、譲渡、開発に関するコモンウェルス法第137条を制定した。この1936年鉱業法は、前年に公布された憲法第12条第1項を踏襲し、鉱物資源の私的所有を禁止し国家所有としたこと、採鉱企業はフィリピン人とアメリカ人による投資が60%以上としたこと、などを明文化している [Wirkus 1974: 159-163]。

イゴロットに対する差別は、1930年から1941年まで刊行された週刊新聞『バギオ・ブレティン』 (*Baguio Bulletin*=以下、*BB* と表記) に垣間見ることができる。アメリカ人によって避暑地やサマーキャピタルとして開拓されたバギオは、ゴールドブームと共にコルディレラ山地社会の主要都市として繁栄した。全国紙『マニラ・ブレティン』は、鉱業、商業の中心地として、あるいは避暑地や観光地として、バギオが将来的に重要な地位を占めるという予測に立ち、毎週金曜の付録紙として *BB* を1930年11月に創刊した [*BB*, November 21, 1930]。

戦争によって廃刊されるまでの約10年間の記事を見ると、鉱山開発に関するニュースをもっとも重点的に取り上げる傍らで、病院、学校など公共施設の建設、独立記念日やリサール・デイなどの祝祭、あるいはイゴロットの「後進性」を伝える生活面なども紙面に盛り込まれている。全国紙の付録新聞として配給された *BB* は、投資家などのマニラのエリート層に鉱山開発の動向を伝えるとともに、イゴロットに関する負のイメージを広めたと考えられる。¹³⁾

12) 金山開発の企業が支払った税金は、1934年に119万3,100ペソだったのが、1936年には220万3,723ペソとなり、およそ倍増した [Wirkus 1974: 200]。

13) 1930年から日本占領が始まるまで刊行された。10周年を記念する記事には、購読数1万6,500部、7万7,000人の想定読者数があり、年5ペソで配給しているとある [*BB*, November 29, 1940]。

見出しには、「貴金属盗難犯のイゴロット」「鉱山事故で遺体が発見された2体のイゴロット」「教育を求める（求めない）イゴロット」「道路建設に賛成（反対）するイゴロット」「鉱山開発で恩恵を得た（得なかった）イゴロット」などであり、「イゴロット」という呼称に読者の好奇心が煽られるような記事になっている。他方で「低地民」という言葉が、見出しに用いられることはなかった。

ウースターがフィリピン委員会から離任した1913年以後、低地民と高地民の分離政策は取りやめられた。アメリカ人植民地官僚たちは、先住民の首長たちと直接交渉を行うよりも、主に教育を受けたイロカノを助手、通訳、書記として雇うことによって、作業効率を上げたかったからである。このときに育成されたイロカノ・エリートたちは、アメリカ人に代わって、コモンウェルス期にマウンテン州の要職に就いた。ジェラルド・フィン（Gerard Finin）は、山地でエリート職に就くことになったイロカノ出身者を「山地社会低地民」（Mountaineer Lowlander）と概念化し、彼らがイゴロットに与えた影響を分析している。

「山地社会低地民」たちは、アメリカ人植民地官僚に倣い、コルディレラ山地の「部族」間の言語・民族的な差異よりも、イゴロットというカテゴリーを重視した。被統治対象を明確化することによって、自らをイゴロットの代弁者と位置づけたかったからである。フィリピン民族主義が高まったコモンウェルス期に表舞台に立った「山地社会低地民」たちは、イゴロットを低地社会へ「同化」させる政策に取りかかった。アメリカ人植民地官僚たちが実践した「恩恵的同化」は、「山地社会低地民」たちの手によって、「フィリピン民族主義」に表看板を変えて引き継がれた [Finin 2005: 60-67]。

フィンによれば、コモンウェルス政府への移行期には、イゴロットに対する差別がいっそう強まったという [ibid.: 116-125]。マウンテン州の公的な要職に就いた低地出身者たちは、イゴロットの政治参加を歓迎しなかった。多くの低地民は、コルディレラ山地社会に関する知識と経験を持ち合わせておらず、イゴロットを「未開人」のまま扱った。たとえば「非クリスチャン部族」の飲酒をより厳しく取り締まり、また闘鶏賭博からも彼らを締め出した。禁酒法——地元で作られたタポイ（米酒）を除く——は、もともと「非クリスチャン部族」を保護するというウースターの理念に基づき1907年に成立したが、1930年代には多くのイゴロットがすでに改宗していた。にも拘わらず、依然として彼らは「非クリスチャン部族」として扱われたのである。他方で「非クリスチャン部族に対する公教育の学費免除」というアメリカ植民地期の規定に関しては、「なぜイゴロットだけ特別扱いするのか」という低地出身者の抗議があり、イゴロットと低地民の知識人がBB上で論争を繰り広げている [BB, July 2, 1937; July 9, 1937; August 13, 1937; August 27, 1937]。

低地民からの不平等な扱いを自らの手で解決するために、教育を受けたイゴロットの青年たちは、コルディレラ山地社会の自立を目指す協会を作った。1941年1月、29人の若者が結成

した「BIBKA」は、山岳地帯を統括するマウンテン州を構成する5つの小地区（ベンゲット、イフガオ、ボントック、カリंगा、アパヤオ）の頭文字を取っている。活動方針には、(1) マウンテン州の住民の福祉全般を向上させること、(2) 村々に住む人々の連帯意識を高めること、(3) マウンテン州における諸問題を、フィリピン国家建設に関わる問題として適切なかたちで表明することを挙げている。協会が初めに行った活動は、マウンテン州の知事としてイゴロットを採用するようマヌエル・ケソン大統領（Manuel Quezon）に嘆願書を送ったことであった [BB, January 17, 1941]。

フィンインは、上記の方針で「イゴロット」という言葉があえて使われなかったことを指摘する [Finin 2005: 135]。この指摘は示唆深い。BIBKA 入会資格者は、教育を受けた、教育を受けていない場合は地主と納税者の「ネイティブ」とだけ言及されていた。「イゴロット」という呼称は、とりわけ低地民たちが高地民を蔑む際に使われていた。そのため「山地社会低地民」、教育を受けた高地民、アメリカ人が連携した行政機関、三者が集った社交や趣味の場では、「イゴロット」という呼称の使用は避けられていた。この三者の協力体制は、コルディレラ山地で暮らす人々が共有する「汎コルディレラ意識」を醸成することによって、マウンテン州で暮らす人々を統一しようとした [ibid.: 67-76]。

「汎コルディレラ意識」は、BIBKA が「イゴロット」をあえて前景化させなかった配慮と深く関わっている。コモンウェルス政府誕生後、マウンテン州の要職に就いた低地民エリートから「イゴロット」は厳しい差別を受けてきた。この点で、イゴロット・エリートにとっても、「未開」や「野蛮」といったイメージがつきまとう呼称を用いる利点はなかった。その代わり「ネイティブ」あるいは「山地民」（「高地民」）と自己規定することで、マウンテン州政治の責任を担うことを強く希望した。マウンテン州のネイティブたちの間で共有し始められた「汎コルディレラ意識」は、「フィリピン人であること」と「イゴロットであること」を両立させたのである [ibid.: 116-120]。

とはいえイゴロット知識人にとって、「フィリピン人になること」は、イロカノやタガログなどの低地民への「同化」を意味していたわけではない。円滑な英語能力は彼らの間で必須条件であった。仲間同士の会話は、イロカノ語やタガログ語よりも、英語がもっとも好んで使われた。多くのイゴロット・エリートたちは、アメリカ系プロテスタント教会に共感を示していた。彼らは「同胞イゴロット」に対して高地民の理想像を、アメリカ人に対して「親米的なフィリピン人」像を提示し、マウンテン州政治により積極的に関わる準備ができていることをアピールした [ibid.: 131-132]。

1930年代後半から日本占領が始まるまでの期間は、低地民とイゴロットの対立とともに、中国と日本の双方からの移民を抱えるバギオにとって、さまざまな緊張がもたらされた時代である。日中戦争が泥沼化するなかで不足した武器、兵器を補填するという日本の需要に応える

かたちで、フィリピンの卑・非金属資源開発は大幅な成長を遂げた [安達 2002: 66-89]。対日輸出をバネにして、フィリピンの卑・非金属総生産額は、1934 年 147 万 9,572 ペソから 1938 年 1,127 万 1,451 ペソへとおよそ 7 倍に増加した [MRPY 1940: 3]。1934 年の卑・非金属の総生産額は、金の総生産額 (2,370 万 1,923 ペソ) のおよそ 16 分の 1 程度にとどまったが、1938 年は金の総生産額 (6,263 万 306 ペソ) の約 5 分の 1 を満たすようになった。このように卑・非金属産業が急成長するなかで、1936 年にはアメリカ人技師・弁護士の数人が、レパント鉱山会社 (設立資本 775 万ペソ) を設立し、マウンテン州マンカヤン村における銅資源の開発に乗り出した [Chamber of Mines of the Philippines 1953: 133-135]。1936 年の創業時からの銅鉱は、ほぼすべて日本に輸出されており、1939 年にはその銅精鉱生産量が、フィリピン総産出量の 3 分の 2 を占める一大銅山となった。¹⁴⁾

一方、宗主国であるアメリカ合衆国からの圧力を受け、日本の経済進出に歯止めをかけるための諸政策を講じていたコモンウェルス政府は、卑金属輸出の多くが日本市場に依存していることを憂慮し、将来的には技術革新によって——その具体的内容は明示されてはいない——欧米向けの輸出に切り替えようとする姿勢を見せていた [MRPY 1940: 10-11, 15]。

マニラ中心のこうした世論に対して、バギオの事情はより複雑であった。目抜き通りのセッション・ロードには、日本人バザーと中国人バザーをはじめ双方の移民が経営した商店や薬局が立ち並び、バーンハム公園を隔てて中国人学校と日本人学校は相對した。日中戦争勃発後も、同地の日本人会と中国人会は、独立記念日 (7 月 4 日) やリサール記念日 (12 月 30 日) の際には、寄付金を出しながら、地元コミュニティとの友好関係を維持していた [Afable 2004a: 167-203]。双方の移民の動機には、経済的な困窮やビジネス開拓があり、政治的な対立を起こすよりも、地元コミュニティとの円滑な関係が優先されたと推測される。

興味深いのは、「コスモポリタンとしてのバギオ」を強調する記事が、当時の *BB* に散見されることである。そこには厳しい時局と直面しながら、民族、言語の差異を乗り越えて連帯し、鉱山開発を軸に発展する近代都市バギオという理想図が提示されている [*BB*, July 23, 1937; April 1, 1938; August 25, 1939]。イゴロットという呼称を用いなかった「汎コルディレラ意識」の場合と同じように、民族間の対立を煽らないコスモポリタニズムを提示することによって、コルディレラ山地社会の発展が目指された。日本占領が始まる直前は、まさに近代化をめぐる様々な憧憬と葛藤がせめぎあう場だったといえよう。

14) 1939 年のフィリピンの銅精鉱生産量は 1,209 万 3,670 トンで、そのうちマンカヤンの生産量は 834 万 2,442 トンであった。卑金属は貴金属と異なり輸送費がかさむため、フィリピン産の銅・鉄のほぼすべてが近隣の日本に輸出された [拓務省拓務局南洋課 1940]。

II 対日協力と対日抵抗をめぐる「アメリカ化」の影

「資源困り込み」に始まったアメリカ植民地期の鉱山開発は、1930年代のゴールドブームを契機に、コルディレラ山地一帯の経済を活性化させた。その発展は、一方で低地出身者とイゴロットとの差別や緊張関係をもたらしつつ、他方で「コスモポリタン都市」や「汎コルディレラ意識」といった連帯を唱えるような自立論も生み出した。こうした分断と連帯の政治は、日本占領にどのような影響を及ぼし、また変化したのだろうか。

イゴロット民族意識に関して、前章で引用してきたフィニンは、日本占領を考察からほぼ除外して、戦前の覚醒から戦後の高揚へと議論を展開している。日本占領期に関しては、彼が用いる資料や方法論では扱うことができないと断っているが [Finin 2005: 136]、イゴロットの民族意識を単なる発展史として描くことのできない問題が、ここには横たわっているように思われる。まずは戦時下マンカヤンに派遣された日本人にとって、イゴロットはどのような存在だったのか、注視していくことから始めたい。なお日本軍政下のマンカヤン銅山の経営実態については、すでに池端 [1996a] が明らかにしているのので、ここでは概略に留める。

1942年2月から3月にかけて三井鉱山派遣団が、マンカヤン入山したときには、ユサフェの指令によって、鉱山施設や主要道路がごとごとく破壊されていた。日本軍の手に軍事資源が渡らないように取り計らわれたからである。派遣団は、破壊を免れた金山の遊休施設をマンカヤン銅山に移転しながら復興作業を進め、同年10月に銅鉱の採掘搬出を始めた。12月下旬に建設復旧工事は終わり、マンカヤン産の銅鉱は佐賀関、四坂島の製錬所へと送られていった。銅山は1943年上半年期に最盛期に達し、労働者は3,500~5,000人に上り、その家族を含めると1万人を超える鉱山コミュニティが創出されたという。1943年4月時点の言語・出身別労働者割合を見ると、パンガシナン34%、イゴロット31%、イロカノ30%、タガログ4%となっている [尾本 1982: 126-127]。1944年の閉山までの操業実績は、粗鉱処理38万7,000トン、精鉱にして4万トン、うち本国へ輸送した精鉱量は2万9,000トンであった [三井鉱山株式会社 1990: 190]。

多くの労働者を集め、復旧から再操業へと漕ぎつけることができた背景には、当時、経理課長を務めた尾本信平によれば、アンタモック金山の倉庫課長を勤めていたアナクレト・ガロ (Anacleto Galo) と警備隊長を勤めていたウィリアム・オラ (William Ola) という2人のイゴロット・エリートの協力があった。その内実については、以下で見ていくが、戦前の鉱山現場における低地民とイゴロットの職級差が踏襲されたことにまず注目したい。

職長クラス、エンジニア、運転手、経理事務者の殆どは比島の知識階級を代表する

イルカノ族。[平岡 1974: 392]

イルカノ、パンガシナンなどのローランド族は、痩せ型で、一見イゴロット族と判別がつく。男女ともシャフスキンのカラフルな服装、油でテカテカ光る髪、コンビネーションの靴、ダンスは無上の楽しみ、イゴロット族に比べ都会じみている。肉体労働のイゴロット族に対し、ローランド族は技術的な仕事に従事した。[尾崎 1974: 374]

ここで述べられている低地民とイゴロットの格差は、まさにアメリカ植民地期に確立されたものに他ならない。引用は、「はじめに」で紹介した三井鉱山派遣団の回想録からのものである。同回想録は、鈴木・花井 [1995]、池端 [1996a]、小林 [1997] らによっても言及されてきたが、マンカヤン駐在した派遣団員たちの現地経験は、取り立てて注目されてこなかった。事実の歪曲や誇大化を含んでいる可能性が高い回想録を、資料として扱うことは不適切と判断したからであろう。とはいえ戦災で失われた資料を補うために、日本人の回想録が、フィリピン史あるいは日本の東南アジアへの関与に関心を抱く研究者から注目されてきたのも事実である [石原 1956; 並河 1972; Ogawa 1972; 宇都宮 1981; Reid and Oki 1986; Batson and Shimizu 1990; 堀田 1994]。¹⁵⁾

筆者が同回想録に関心を寄せるのは、先の引用に見られるように、派遣団の現地経験がアメリカ植民地主義がもたらした「遺産」と密接に結びついているからである。たとえば 1943 年のクリスマスを回想した尾本は、このことをより如実に語っている。

マイクの前に立った宣教師は堂々たる態度と音声で演説をしている。1,000 人以上もおったと思われる。従業員は盛装をし、静かに、まことに咳一つせずに傾聴している。宣教師が何を話しているのか全く判らない。この時、もしあの宣教師が排日の宣伝をしていたらどうだろう。また我々と異なった神を信ずる彼らと本当に一体となれるのだろうか、といった疑念も湧いてくる。(中略) 我々が彼らと意志を通ずる手段は、すなわち言葉は英語なのである。しかもその英語たるやすこぶる貧弱である。また我々の社宅にある電気冷蔵庫も米国製であり、喜んで飲む酒もスコッチかカナディアンである。宗教の相違、言葉の相違に加えて使っている商品までも英米のものなのである。これでどうして彼らを日本に引きつけることができようか。私は教会前の広場から社宅に帰りながら、ひとりむずかしい問題〈あるいは矛盾といった方がよいかもしれない〉を考え続けてきた。[尾本 1982: 18] (〈 〉は、原文による)

15) 回想録を含めたフィリピンに関する戦前・戦中・戦後の日本語資料の文献目録として早瀬 [2009]。

物質面と精神面における欧米列強の圧倒的優位があつてこそ、派遣団の生活や銅山経営が成り立ったという矛盾や劣等感が、ここには吐露されている。回想録に出てくる宣教師は、淳心会のベルギー人神父カルロス・デスメット (Carlos Desmet) であった。デスメット神父は、日本占領期に関して下記の記述を残している。

日本人は鉱山を占領し、それを再稼働させようとした。労働者を誘引するために、かれらは私の力を得えようとポントックへ訪ねてきた。私は鉱山でミサを行った。多くの人々がミサを聴きにやってきましたが、その後、鉱山で強制的に働かされた。日本人は人々を魅了するために金を与えた。人々は、食糧不足ゆえに、断ることができなかった。数週間の間、日本人は鉱山を再稼働させるために勤勉に働き、建物と機械は補填されるか、あるいは修理され、すぐに再運転されるようになった。最初のころは、日本人は分別をわきまえ、司祭に対しても親切であった。しかし司祭をもはや必要としない日が来た。司祭は定期的に活動を報告しなければならず、また村々に出向く場合には許可を得なければならなかった。司祭は山中のゲリラを支援しているのではないかと容疑をかけられた。[Dobbels 1983]¹⁶⁾

ここには三井鉱山の労働者動員のために協力させられたこと、日本軍によってスパイ容疑をかけられたことが述べられている。淳心会は、日本占領下に5人の神父が殺害され、数人の神父がロスバーニョス収容所に入れられ、また多くの施設が破壊された [Medina 2004: 107]。バギオ占領後直ちにアメリカ人、イギリス人、および中国人は、日本軍にとって「敵性外国人」と判断され、キャンプ・ジョン・ヘイに強制収容された [Wilson 1965: 88]。デスメット神父が収容を免れたのは、当時日本の友邦であったドイツがベルギーを占領していたからだと推測される。しかし英語をうまく話すことのできない派遣団にとってみれば、彼はアメリカ人、イギリス人と並ぶ「白人」を象徴していた。エписコパル教会のアメリカ人牧師たちは、当初収容されたが、「日本軍はキリスト教徒を敵とみなさない」という宣撫工作の目的で後に釈放された [Halsema 1988: 169]。日本軍政は、「白人」の宗教関係者に脅威を覚えつつも、彼らの力に頼らざるをえなかった、ということであろう。

デスメット神父のほかに、労働者との仲介に活躍したのは、先のアナクレト・ガロであった。ガロは1893年に、スペイン軍のもとで働いたイロカノの父と、ポントック出身のイゴロットの母の間に生まれた。フィリピン革命を経て、アメリカ植民地期が始まると、イゴロットの改

16) 1975年マンカヤンに赴任したジェロム・ドベルズ神父 (Fr. Jerome Dobbels) が、同僚神父に送った「淳心会マンカヤン活動史」のなかに、デスメット神父のこの手記が含まれている。

宗のために、多くのキリスト教団体がコルディレラ山地に参入した。ガロは、ボントックやサガダを中心に布教活動を行ったエписコパル派教会の学校で初等教育を受けた。イロカノ語とボントック語で育った彼は、同校で英語を学び、アメリカ人のウォルター・クラップ牧師 (Walter Clapp) が編纂した、初のボントック語辞書 (1908 年刊) のアシスタントを務めた。¹⁷⁾ 卒業後はイフガオ区キアングンの出納課で働き、イフガオ語を習得した。1913 年から 1915 年までイフガオ区の出納係長を務めた。その後ボントックに戻り、マウンテン州知事を務めたアメリカ人のジョン・アーリー (John Early)、ウィリアム・ドサー (William Dosser) の下で秘書を務め、1931 年マウンテン州ボントック区を管轄する副知事となった [Jenista 1987: 192, 296; Afile 2004b: 451, 456]。フィンが定義した「山地社会低地民」であったガロは、アメリカ人植民地官僚たちに倣い、山地の先住民を「イゴロット」と一括し、彼らとアメリカ人との仲介を行っていた [Finin 2005: 62-63]。

日本占領が始まる以前のガロの遍歴をみると、「アメリカ化」を積極的に受け入れた鋭敏な反応を確認できる。なかでも辞書編纂のアシスタントは、異なる世界を結びつけた彼の最初の行為であるが、その後の活動においても、ある種の「翻訳」的行為を確認することができる。つまりガロは、イゴロットに対しては近代の啓蒙者として振る舞い、一方アメリカ人やマニラの政治エリートに対しては、声を持ったネイティブとして差別改善や自治の要求を行った。こうした彼の二重行為を可能にしたのは、ボントック語とイフガオ語 (山地社会)、イロカノ語 (低地社会)、そして英語によって語りかける相手を、ある程度自由に選ぶことができたからであろう。¹⁸⁾

日本占領期においても、イゴロットと日本人とを結びつける翻訳者を、ガロは務めた。尾本によれば、労働者募集にはガロが同伴し、尾本が英語で話した内容を、ガロが現地語に訳したという。その際、尾本はしばしばイゴロット労働者たちに対して「虐げられてきた東洋民族の共同戦線」を語ったという [尾本 1982: 13-14]。もちろんガロは、「大東亜共栄圏」の意義の翻訳よりも、失業者のための再就職の窓口になっていたと推測されるが、派遣団は、イゴロットと日本人との間にある種の親近感を覚えたようである。¹⁹⁾ たとえば回想録から次の 2 箇所を引用してみよう。

-
- 17) クラップは序文のなかで、資料提供を手伝ってくれた現地の助手としてガロと後述するヒラリー・ピッター・クラップ、他 6 人に謝辞を示している [Clapp 1908: 6]。
- 18) マウンテン州の政治家は、スピーチで用いる言語を地域ごとに変えていた。たとえば選挙の際に候補者たちは、バギオではタガログ語を用いることができたが、他の地域ではその土地の言語を用いざるをえなかった。ちなみにコモンウェルス憲法は、スペイン語、あるいは英語の読み書きができる 21 歳以上のフィリピン人に選挙権を与えるとした。なお 1930 年代のマウンテン州の人口およそ 22 万 4,000 人のうち、有権者は 5,000 人ほどだった [Finin 2005: 115-116]。
- 19) 地方宣撫において「大東亜戦争聖戦論」が、いかに無力だったかは、第十四軍軍宣伝班将校としてフィリピン滞在した人見潤介も語っている [渡集団報道部 1996: 19]。

イゴロット族という人達と日本人とは、何処かで繋がっているような気がするのです。(中略) 種々の迷信の一面にも似た所があります。その上に大体、ふんどしに腰巻という格構は、イゴロット族と日本人しかいません。[高井 1974: 266] (傍点は引用者による)

男は房付きの禪、女は横赤棒縞の腰まきを着け、頭に珠をつないだ装飾をまきつけ、いずれも裸、跣足で、山中岩石の上を馳駆する。雲海の出現のときイゴロットが太陽の照射をうけて立つ姿、神々しさは神代を思わせるものがあった。[尾崎 1974: 374] (傍点は引用者による)

ここには「太陽」や「ふんどし」といった視覚に基づいた日本人とイゴロットの類似性が述べられている。²⁰⁾ 注目したいのは、先の「低地民」に関する回想録からの引用と比較すると、イゴロットと低地民の差異がいっそう際立つことである。つまり西洋の影響を強く受け、英語を流暢に扱い、洗練された立ち振る舞いができる低地民は、尾本がクリスマスに痛感した、欧米列強の圧倒的優位を彷彿とさせた。一方、「田舎じみた」、あるいは「英語のしゃべれない」イゴロットは、互いにコミュニケーションがうまくできなくても、派遣団にとって自らの劣等感を安心して重ねることができる存在だったといえる。

派遣団の他者認識、つまり彼らが語るイゴロットとの友愛は、「大東亜共栄圏」の理念というよりも、むしろアメリカ植民地主義が定着させた低地民とイゴロットという分断関係に依拠していた。彼らの友愛は、アメリカ人植民地官僚たちの、「純粹」なイゴロットを保護するという友愛と、似たような論理の上に成り立っているからである。前者は「アメリカ化」された低地民に対して、後者はフィリピン革命を率いた低地民に対して危機感を覚えたからこそ、イゴロットを「無害」かつ「信頼」できる存在としてカテゴリー化した。そしてアメリカ人はイゴロットの「アメリカ化」を、日本人はイゴロットの「日本化」を歓迎したのであろう。

もちろん最底辺労働者であるイゴロットと経営者である派遣団との間には、歴然とした格差があった。実際もっとも過酷な労働条件でイゴロットを雇用しており、意思疎通できる言語も欠いていた。ゆえに「離れた」両者を結びつけることができるガロに対して、派遣団はもっとも信頼を寄せたのであろう。イゴロットと低地民の間に生まれ、教育を受け、管理職に就いていたガロは、言い換えれば、イゴロットであり、イゴロットでない中間的な存在だったと言える。

とはいえ、ガロが行った翻訳や仲介は、抗日ゲリラの標的になりかねない危険な行為でも

20) 大日本軍司令官の宣伝資料「イゴロット族良民に告ぐ」(1942年5月頃に、ポントックにて5万部配布)にも、「日本人とイゴロット族とは同種族である」とある [渡集団報道部 1996: 184-186]。

あった。事実、彼と共に対日協力したウィリアム・オラは、マンカヤンの私設警備隊長を務めたが、戦争末期に抗日ゲリラによって殺害された。注目したいのは、マンカヤン付近の抗日ゲリラ活動も、アメリカ植民地期に広がったイゴロットのネットワークの上に成り立っていたことである。

戦争勃発と同時に同地域の抗日ゲリラ部隊を編成したのは、バギオの米軍基地のキャンプ・ジョン・ヘイに勤務していたユサフェ大佐ジョン・ホーラン (John Horan) であった。ホーランは、1942年1月16日にレパント鉱山とスーヨーク鉱山の幹部と接触し、自らの勢力へ鉱山労働者を組み込むことに成功した。彼は鉱山会社の職級にしたがって部隊を組織し、監督官には少佐、大学卒の技師には大尉、鉱夫長には中尉の階級を与え、鉱夫長の小隊にイゴロットを組み込んだ [Chaput 1987: 56]。対日協力労働者の場合と同じように、戦前の職級に基づいた動員が仕掛けられた。いずれの勢力においてもイゴロット労働者が、最底辺に位置づけられている事実、アメリカ植民地主義がもたらした民族・階級格差を窺える。

1942年1月のホーラン降伏後、旧ユサフェ将校たちは北部ルソン米国防軍 (USAFIP-NL) を結成し、抗日活動を続けた。後に司令官となったラッセル・ヴォルクマン大佐 (Russell Volckman) の回想のなかで、イゴロットに対してもっとも影響力を持った人物として、また日本軍政から最も狙われた人物として、バド・ダンワ (Bado Dangwa) の名が挙げられている [Volckman 1954: 146]。ダンワは、先に言及した三井鉱山の警備隊長を務めたオラの義兄であった。

ダンワが組織したゲリラ部隊については、ダンワの秘書を戦後務め、イゴロット抗日戦史を編纂したボニファシオ・マリーネス (Bonifacio Marines) が明らかにしている [B. Marines and C. Marines 2010]。ゲリラ記録、ヴェテラン、市民の証言、ダンワ個人文書に基づいたマリーネスの著書は、400ページを越え、北部ルソン米国防軍の抗日戦を、イゴロットの視点から描いている。専門の歴史書ではないので、注や文献目録、資料批判はないが、抗日ゲリラ活動のみならずイゴロットにとっての対日協力を知る上で貴重な資料となっている。

1906年バギオに隣接するカパンガンに生まれたバド・ダンワは、トリニダッド農業高校で運転技術を習得した。1916年に創設された同農業高校は、ウースターの非クリスチャン部族に対する基本理念を踏襲し、生徒をイゴロットに限定した。つまりイゴロットの生徒が低地民の生徒と競争したり、嫌がらせを受けたり、あるいは劣等感を覚えたりするようなことがないような学習環境を整えたかったからという [BB, June 16, 1933]。学費免除、全寮制、実務重視を採用した同校は、後に政治家、教育者、官僚となった人物を多く輩出した。1928年に同校を卒業後、ダンワはイゴロット初の会社経営者としてダンワ・トランコ (Dangwa Tranco) というバス会社を創業し、マウンテン州に公共交通をもたらした。日本占領下のダンワの抗日ゲリラ部隊は、トリニダッド農業高校の卒業生や自社の社員から編成されたが、その人脈はコ

ルディレラ山地をまたぐイゴロットのネットワークであった [B. Marines and C. Marines 2010: 29-30, 42-51, 136-139]。

戦争勃発後、ダンワは直ちに会社の車両すべてをユサフェに提供した。1942年末には、自身のイゴロット・ゲリラ部隊を北部ルソン米国陸軍へ合流させ、少尉として第66歩兵隊を指揮した。同年12月、ダンワは同部隊を共に率いたデニス・モリントス (Dennis Molintas) に対して、次のような密書を出している。なおモリントスもトリニダッド農業高校の卒業生であり、戦前はその校長を務めた。

日本人は私を捕まえようと躍起になっている。小汚い手口も使っている。レッシオ・カガス (Leccio Cagas), アレホ・バグニ (Alejo Bagni), サンチャゴ・トターネス (Santiago Totanes), ウィリアム・オラ達は、多くの贈り物をもらい、私を降伏させる説得のために送り込まれた。多くの友人たちも私を降伏させるために使い回されている。私たちの下院議員であるラモン・ミトラ (Ramon Mitra) やダンワ・トランコの弁護士であったカルロス・アルベアル (Carlos Alvear) の影響力を使い、私が降伏するならば、5万ペソをダンワ・トランコに支払うとしている。[*ibid.*: 212]

ここに挙げられているミトラとアルベアルはマニラ出身であるが、バグニはダンワの級友、カガスとトターネスはダンワ・トランコ創設時の設立メンバーである。マリーネスによれば、トターネスとカガスは対日協力を表向きに行いながらゲリラ活動を陰で支援していたが、カガスは後にゲリラ容疑で日本軍に処刑された。オラがダンワと何らかの接触を持っていたことも、ここには示唆されているが、交渉内容は明らかにされていない。なお三井鉱山はラ・トリニダッドにあるダンワ・トランコの倉庫を使用しており、軍政幹部は賃貸料の支払いや、戦前と同じ状態で従業員を雇うことを約束する手紙を、ダンワに出していた [*ibid.*: 64, 151-162, 240-242]。

表向きには対日協力を行いつつ、裏でゲリラ支援を行っていたエピソードが、他にも盛り込まれているが、経済的理由から三井鉱山の下で働かなければならなかった「市民」をダンワは殺害しなかったという [*ibid.*: 177-178, 231]。三井鉱山派遣団も、オラが警備隊長として務めている限りは、ダンワ部隊から激しい攻撃を受けることはないと安心していた。実際ゲリラ攻撃が激しくなったのは経営が傾き始めた1944年に入ってからであった [指方 1974: 400]。

マリーネスは、ダンワ部隊がアメリカ合衆国の抗日戦——多くの「市民」を殺さなかったことも含めて——に大きな役割を果たした意義を強調している。同書は、イゴロット・ゲリラとアメリカ軍の共闘に捧げられている。この視点に立つマリーネスにとって、対日協力者とは「日本が占領する前に、アメリカ人によって建てられた教育機関で学位を取得したことをす

ぐに忘れ」, 「イゴロット・ゲリラを非難するためにアメリカ人から習った英語を使った」アンチ・イゴロットの人たちなのである [B. Marines and C. Marines 2010: 175]。彼はコラボレーターとして、数名の「低地民」を挙げている。

密書にも名が挙げられていたように、ダンワ降伏工作を行ったラモン・ミトラは、その一人である。20世紀転換期バタンガスに生まれたミトラは、マニラのロースクールを卒業し、公務員として刑務所局 (Bureau of Prisons) に務めた。パラワン島やミンダナオ島ザンボアンガにある流刑地に勤務したが、1930年代のゴールドブームを契機に退職し、バギオで弁護士会を作った。大柄でメステイソの容貌を持ったミトラは、1938年下院議員選挙で、マウンテン州のナショナリスタ党候補として当選した [BB, November 15, 1941]。日本占領が始まると、知識階層に属する多くの低地民が対日協力を行った。ミトラは軍政が実施した「隣組制度」のリーダーとなり、戦時下でバギオ市長を務めた [Finin 2005: 137]。

しかし、日本軍政下で要職を務めたのは、低地民だけではなかった。戦前、自治要求や差別改善を訴えていたヒラリー・ピッタピット・クラップ (Hilary Pit-a-pit Clapp) が、1942年イゴロットとして初めてマウンテン州知事に就任した。クラップは州知事という立場を利用し、宣撫工作の名目でコルディレラ山地を自由に歩き回りながら、日本軍の背後で抗日ゲリラを支援した。1945年4月に抗日ゲリラに殺害されてしまったが、イゴロットの英雄として民衆に記憶されているという [Chungalao 1953]。クラップの説得によって軍政下においても、マウンテン州イフガオ区を管轄する副知事に留まったルイス・パーウィッド (Luis Pawid) は、クラップの悲報に接し、下記のような弔文を寄せた。

クラップ博士の死は、私たちにとって大きすぎる喪失である。黒人にとってのブッカー・ワシントン²¹⁾のように、ヒラリー・ピッタピット・クラップ博士は、単に医学博士としてではなく、教育の発展に尽くし、人々を実直に先導した。[Fry 1983: 212]

イゴロット社会の「アメリカ化」は、抗日活動ネットワークを支えただけでなく、対日協力の動機になったことも窺い知ることができる。1897年にボントックに生まれたピッタピットは、同地で宣教活動を行った先述のウォルター・クラップ牧師の後見を受け、ヒラリーという名とクラップ姓を授かった。同郷者であり、同年代であったピッタピットとガロは、共にク

21) ブッカー・ワシントン (Booker Washington: 1856-1915) は、南北戦争後、「解放」された黒人奴隷の成人教育に尽力した。彼が校長を務めたアラバマ州タスキーギの職業訓練校は、戦争によって農業が荒廃し、鉱山や建設現場において厳しい条件下で働いていた黒人たちを救うためであったという。白人社会に対して明確な抵抗を突きつけたウィリアム・デュボイス (William Du Bois: 1868-1963) とは対照的に、富裕な白人コミュニティとも積極的に交際しながら、学校運営や政治活動で円滑な資金繰りをした [Denton 1993: 90-91, 179-180]。

ラップ牧師のアシスタントとして辞書編纂に関わった。多言語を操りながら識字能力もあった両者は、宣教師や植民地行政官の通訳や家事を務めた。アメリカ植民地主義の衝撃を最初に受け止め、積極的に協力していった世代であったという [Afable 2004b: 450, 452]。

エピスコパル教会の最優秀特待生となったクラブは、1906年にバギオで初等教育を受けた後、カナダの高校に留学し、ギリシャ語とフランス語で優秀賞を取った。帰国後フィリピン大学で医学を学び、1920年代半ばから故郷の診療所で初のイゴロット医師として勤務した。1930年代にはイゴロット社会の改善運動を牽引し、「イゴロット」という呼称を避けた「汎コルディレラ意識」の重要性を同胞イゴロットたちに説いた [Finin 2005: 67, 88]。また当時フィリピン副総督を務めたジョセフ・ハイデン (Joseph Hayden) に対して、アメリカ人ウィリアム・ドサーの後任として、マウンテン州知事に自身を推薦するようたびたび私信を送った。州知事就任は、クラブにとってアメリカ植民地期からの願望であった。とはいえ後任者は、低地出身のロドルフォ・バルタサル (Rodolfo Baltazar) であった [Fry 1983: 194]。

戦後、「コラボレーター」としてミトラは非難された一方、クラブは英雄視されたという。多くの人々は、クラブの日本軍政への加担は、イゴロットのための社会活動のために行っていることを知っていた [*ibid.*: 211; B. Marines and C. Marines 2010: 210]。一方、低地民のミトラは、アメリカ植民地期から引き続き日本占領期においても、イゴロット社会に対する権力者として君臨してきた。対日協力という行為であっても、その主体が低地民であるのか、イゴロットであるのかによって社会的評価が異なった。両者の緊張関係が、その指標に反映されていたのである。

1949年のベンゲット州下院議員選挙では、低地民とイゴロットの対立が、あからさまなかたちで、初めて表出された。同選挙では、ミトラとイゴロット代表のモリントスの一騎打ちとなったが、ミトラを対日協力者として批判しながら、イゴロットの教育改善や民族意識の高揚を謳ったモリントスが当選した。両者の争点は、対日協力問題そのものよりも、イゴロットのために誰が声を発するのか、にあったという [Finin 2005: 148-149]。この要求は、戦前のBIBKA、日本占領期のクラブ、戦後のモリントスへと引き継がれていった。

しかし事態をより複雑にさせたのは、イゴロットの民族意識の高揚や発展だけに、自立問題を還元できないことである。1949年選挙の際、バド・ダンワはモリントスではなく、ミトラ支持を表明した。多くのイゴロット有権者が、対日協力を行い、また低地出身者でもあったミトラを指示したダンワに対して強い疑問や反感を持った。これに対し、ダンワは自身の立場を次のように示したという。

残念なことに私たちのなかには、派閥主義 (sectionalism) を論点に持ち込んで、寄りかかろうとしている者がいる。派閥主義を使うのは、単に非フィリピン人ということでは

く、先住民の力 (native elements) を引き出すことに対して有害である。私たちネイティブは、低地出身の同胞たちが就く職種をこなすための準備ができているだろうか。私たちは彼らの教えと啓示をまだ必要としているのではないだろうか。(中略) 私たちが“ギブ・アンド・テイク”を実践できるなら、大きな強みになるだろうし、ネイティブと低地民という分断を取り払うことができる。[*ibid.*: 147-148]

バギオ・ブレティンの後継として戦後発刊された週刊新聞『バギオ・ミッドランド・クーリエ』(*Baguio Midland Courier*) に載せたダンワの立場表明には、低地民の先導によって近代化を成し遂げる意思が強く反映されている。「汎コルディレラ意識」の場合と同じく、低地民との連帯を語るダンワは「イゴロット」という呼称をあえて使わなかった。1953年マウンテン州知事に就任したダンワは、ベンゲット州下院議員として返り咲いたミトラと共に、水力発電ダムの建設を推進した。反共政策を強く打ち出したマグサイサイ政権期に行われた同プロジェクトは、アンクラオ(モリントスの出身地)に住むイバロイの人々を、その土地から半ば強制退去させたという [B. Marines and C. Marines 2010: 385]。戦後、低地民とイゴロットとの「恩恵的同化」を唱えたダンワは、20世紀初頭アメリカ人による鉱山開発と似たような資源囲い込みを行った。

日本占領下でイゴロット・ゲリラのリーダーとして共に戦ったダンワとモリントスの戦後の亀裂を、どのように考えることができるだろうか。ミトラという低地民を軸に派閥政治像を見出すことができるかもしれない。またクラップの殺害理由は、ポントック出身の彼に対するイフガオ・イゴロットの妬みに他ならなかったという説も出されている [Fry 1983: 211-212]。もちろん三井鉱山に協力したガロについても、威信を利用して労働者動員を行ったという点で寡頭的指導者と判断することもできるだろう。いずれの事例も、マッコイの派閥政治論によって説明できるかもしれない。

しかしこのアプローチでは、アメリカ植民地主義が行ったコルディレラ山地の社会改造を批判することができない。鉱山現場、行政機関では、アメリカ人が頂点に君臨し、有識の低地民が中間に、イゴロットが底辺に位置づけられた。コルディレラ山地の先住民は、「イゴロット」と一括されることによって、アメリカ植民地主義の「恩恵」の対象となってきた。とはいえ本稿を通して確認してきたように、「アメリカ化」を積極的に受け入れるか否かで、その「恩恵」に大きな差が生じた。イゴロット同士の間で生じた妬み、イゴロットと低地民の間で生じた利害対立についても、派閥主義ではなく、アメリカ植民地主義がもたらした不均衡な近代化に要因が求められなければならない。

非クリスチャン部族に対して、多大な関心を寄せながら、その統治に関わったウースターは、自身の回顧録の表紙裏で、クラップの2枚の写真を並置させている [Worcester 1921]。一つ

はピッタピットと呼ばれていた幼年期の頃のものであり、伸びきった髪にふんどし姿、満面の笑顔でカメラに向かっている。それから9年後に撮られたという、いま一つの写真では、白いスーツを身にまとい、散髪した髪をポマードで整え、西洋名を持つヒラリー・クラップとして厳格な表情でカメラに臨んでいる。

『フィリピン 過去と現在』と題されたウースターの回顧録にみるアメリカ植民地主義の自負は、この2枚の写真に凝縮されているといえるかもしれない。ロドニー・サリヴァン(Rodney Sullivan)によれば、イゴロットに対するウースターの愛情に疑う余地はなく、低地民やムスリムに比べて、アメリカ支配に対して非常に従順であった「野蛮人」の高貴さを見出していたという[Sullivan 1991: 162-163]。つまりスペイン植民地期には「野蛮」であった先住民が、「恩恵的」なアメリカ人に庇護されることによって、「洗練」された近代人へと「進化」を遂げた、ということである。

しかしアメリカ植民地主義の理想を体現したとされるクラップが、ゲリラ支援を行ったという留保をつけたとしても、なぜ日本占領下で対日協力者となったのだろうか。アメリカ植民地主義の「成功」という語りでは、マウンテン州知事に就任し、アメリカ人が統率した抗日ゲリラによって殺害されてしまった日本占領下のクラップの想いと運命に、うまく接近することができない。彼が対日協力を行ったのは、戦前のアメリカ人や低地民との連帯が、イゴロットに一定の恩恵をもたらしつつも、その被支配的な立場を変えるものではなかったことの証左ではないだろうか。クラップはあえて日本軍政に加担することによって、イゴロットの解放を模索したのではないだろうか。

とはいえ日本軍政は、アメリカ統治を温存したため、その解放も結局、戦前の格差や抑圧を持ち越したのである。三井鉱山の開発現場やアメリカ人将校が率いたゲリラ部隊で、イゴロットは最底辺のグループに位置づけられていた。軍政という暴力は、その立場にいつそう圧力をかけた。最前線の戦闘で殺し合うことを避けるために、ダンワ率いるイゴロット・ゲリラ部隊は、三井鉱山で働いた「市民」を攻撃しなかったのである。実際ダンワは、クラップの立場を憂慮し、自身のゲリラ部隊に参加するよう手紙を出していたが、クラップは固辞したという[Fry 1983: 207]。

日本占領下において対日協力者が対日抵抗を行い、抗日ゲリラが対日協力を行ったという一見矛盾した両者の関係は、少なくともコルディレラ山地の場合、マッコイの寡頭政治論では十分に説明することができない。イゴロットによる対日協力と対日抵抗の境界があいまいだったのは、最底辺に位置づけられているという抑圧から解放される手段として、両勢力が近代化を求めていたからである。

1949年のベンゲット州下院議員選挙をめぐる、ダンワとモリントスの亀裂も、この日本占領下の対日協力と対日抵抗の構図と類似している。前者は、低地民との協力関係を、後者はイ

ゴロットの自立を強調したが、イゴロット社会の近代化という目的で両者は一致していた。1950年代のフィリピンでは、共産主義に影響を受けたフクバラハップ (Hukbalahap) と呼ばれるゲリラ集団が席卷した。抗日ゲリラに起源を持つこの民族解放戦線は、中部ルソンを活動拠点にしていたが、隣接するコルディレラ山地社会での影響力は限られていた。イゴロット・ゲリラ部隊を率いたダンワとモリントスは戦後、隣地の革命運動に参加することなく、企業家、教育家、政治家として名声を得た。民族解放を求めるイゴロットの声が、革命ではなく、近代化と共鳴してきたことに、同地における「アメリカ化」の深遠な影響を窺い知ることができる。

む す び

本稿は、コルディレラ山地における対日協力問題を、その対極にある抗日活動も射程に入れつつ、「アメリカ化」という近代化がイゴロット社会にもたらした矛盾として提示することを試みた。I章では、アメリカ植民地期の鉱山開発の展開に着目しながら、暴力的な資源奪取を伴った「恩恵的同化」政策、イゴロットと低地民の分断と連帯の政治を素描した。山地社会の「アメリカ化」が、II章で論じたように、日本占領下におけるイゴロットの対日協力と対日抵抗の動機を決定したからである。イゴロット・エリートは、一方で三井鉱山派遣団のマンカヤン銅山経営やマウンテン州地方政治に協力し、他方で抗日ゲリラ部隊を率いながら抵抗した。そこで明らかになったのは、最底辺に位置づけられているという抑圧から解放されるためのイゴロット・エリートの目標が、両勢力に共通しており、それゆえに対日抵抗と対日協力の境界が非常にあいまいになっていたことである。抑圧と解放が同じ近代化という原理によって働いてしまうジレンマが、1930年代のイゴロットの自立論には刻まれていた。日本占領期において、そのジレンマは、対日協力と対日抵抗の相互依存関係として持ち越されたといえる。

「はじめに」で言及したマッコイは、日本占領はフィリピンに政治的構造の変化をもたらさなかった、と指摘した。つまり他の東南アジア諸国と比べて、日本占領はフィリピン政治に構造的変革を迫るほどの衝撃を与えなかった、ということである。アメリカ植民地主義が実施した進歩的な理念と政策は、封建的なカシーケによって無力化させられてしまうか、屈折させられてしまった。甚大な被害や犠牲という点で、日本占領はインパクトを持っていたが、中部ルソンで起こったような階級闘争がイロイロ州では起こらなかった。戦後フィリピンの多くの地域でも階級闘争は行われなかったが、その理由は、地方エリートたちの派閥政治が強い影響力を維持しているからではないか、とマッコイは推測する。

確かに戦後のコルディレラ山地社会でも、少なくとも1970年代のマルコス独裁政権期の乱開発が始まるまでは、目立った階級闘争や革命運動は行われなかった。しかしまさにアメリカ植民地主義の産物であったイゴロット・エリートたちが、なぜ日本占領期に対日協力を行った

のか、あるいは抗日ゲリラとも連携しつつ、その社会発展を目指したのだろうか。スペイン植民地期に「悪因」をなすりつけるカシーケ論では、それらを十分に説明することができない。

ベンダとマッコイを軸に展開された変化説か、あるいは継続説か、という従来の日本占領期に関する議論は、発展と進歩を前提にしたオリエンタリズム的な視点が刻み込まれていた。すなわち変化説とは、欧米人研究者にとって「正常」な発展をしているということであり、継続説とは「異常」な発展、あるいは停滞しているということである。

「はじめに」で言及したコンスタンティーノは、欧米人研究者に抵抗しながら、フィリピン人が自ら語ることでできる民族発展史を模索した。コンスタンティーノが練り上げた「未完の革命」論は、日本占領後に起こったのが革命ではなく、アメリカ合衆国への再依存であったという戦後フィリピンの現状を鋭く批判する同時代史的な試みであった。「アメリカ化」への抵抗として、コンスタンティーノはフィリピン民族主義の到来を強く歓迎した。

しかし本稿で得られた結論は、イゴロット民族主義と「アメリカ化」は、むしろ親和性が非常に高かったことである。アメリカ植民地主義の「恩恵」の上に成り立つ民族主義を、コンスタンティーノならば、「えせ」民族主義と一蹴するかもしれない。しかしそれでは済まされない問題が横たわっているように思われる。すなわちイゴロットが担うのか、あるいは植民地権力が担うのか、という相違はあるが、どちらも近代化を求め、推進する主体であることに変わりはないからである。本稿で検討したように、アメリカ植民地期の「恩恵的同化」は、日本占領期にはイゴロットと日本人の友愛、戦後はイゴロットと低地民の開発協力とかたちを変えながら、恩恵に授けられない「イゴロット」を絶えず生み出しつつ、イゴロット社会の発展論として受け継がれていった。「恩恵的同化」の連鎖ともいべき同地の歴史のなかで、対日協力を問わねばならない理由もここにある。

フィリピン各地の鉱山は、戦争末期の空襲や地上戦によって大きな被害を蒙ったのにもかかわらず、戦後まもなく復興を遂げた。1950年に勃発した朝鮮戦争が、アメリカ合衆国の軍需物資の需要を高め、卑金属ブームがフィリピンに到来したからである。1951年、卑金属資源のフィリピン総産出量は126万282トン記録したが、これは1939年の135万9,730トンとほぼ匹敵する生産量である [Chamber of Mines of the Philippines 1953: 32]。輸出先第1位は3分の2を占めたアメリカ合衆国であり、第2位は残りの3分の1を占めた日本であった。戦後マンカヤン銅山は、100%民族資本となったレパント鉱山会社によって開発が進められた [Disini 2002]。そこで得られた銅資源は、米日比が協力し合った共産主義に対する戦争に利用されたことを最後に付記しておきたい。

参 考 文 献

- Afable, Patricia O. 1995. The Peoples of Eduardo Masferré's Photographs. *Discovery* 25(2): 11-19.
- . 1998. Eduardo Masferré's Subjects. In *Anales del Museo Nacional de Antropología 1998*, edited by Ministerio de Educación y Cultura, pp. 83-107. Madrid: DIN Impresores.
- . 2004a. The Baguio and Trinidad Business Families and the Japanese Association. In *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highland*, edited by Patricia Afable, pp. 166-203. Baguio City: Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon, Inc.
- , ed. 2004b. *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highland*. Baguio City: Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon, Inc.
- Agoncillo, Teodoro A. 1965. *The Fateful Years in the Philippines*. 2 vols. Quezon City: R. P. Garcia Publishing Company. (第 1 卷前半部の邦訳。アゴンシリヨ、テオドロ、A. 1991. 『運命の歲月』二村 健 (訳)。東京：井村文化事業社。)
- . 1984. *The Burden of Proof*. Manila: University of the Philippine Press.
- Anderson, Benedict. 1995. Cacique Democracy in the Philippines. In *Discrepant Histories*, edited by Vicente Rafael, pp. 3-47. Philadelphia: Temple University Press.
- Bagamaspad, Anavic; and Hamada-Pawid, Zenaida, eds. 1985. *A Peoples' History of Benguet Province*. Baguio: Baguio Printing and Publishing.
- Barrows, David P. 1905. Population. In *Census of the Philippine Islands: 1903*, Vol. 1, pp. 411-585. Washington: United States Bureau of the Census.
- Batson, Benjamin; and Shimizu, Hajime. 1990. The Tragedy of Wanit. In *Journal of Southeast Asian Studies*. Special Publications Series, no. 1.
- Benda, Harry. 1958. *The Crescent and the Rising Sun*. Hague: W. Van Hoeve Ltd.
- . 1972. *Continuity and Change in Southeast Asia*. New Haven: Yale University Southeast Asian Studies.
- Chamber of Mines of the Philippines. 1940. *Philippine Mining Year Book 1939*. Manila.
- . 1953. *Philippine Mining Year Book 1952*. Manila.
- Chaput, Donald. 1987. The Miner Warriors of the Philippines. *Philippine Studies* 35(1): 51-70.
- Chungalao, Rufino. 1953. Data on a Few Educated Natives of Bontoc. In *Historical Data for Bontoc, Mountain Province*. National Library in Manila.
- Clapp, Walter C. 1908. *A Vocabulary of Igorot Language as Spoken by the Bontoc Igorot*. Manila: Bureau of Science Division of Ethnology Publications.
- Constantino, Renato. 1974. *Identity and Consciousness: The Philippine Experience*. Manila: Malaya Books Inc. (コンスタンティノー、R. 1975. 「民族的自覚の問題 (上)」鶴見良行 (訳) 『思想』610: 106-130. 「民族的自覚の問題 (下)」鶴見良行 (訳)。『思想』611: 34-57.)
- . 1975. *The Philippines: A Past Revisited*. Quezon City: Tala Publishing Cooperation. (コンスタンティノー、レナト。1978. 『フィリピン民衆の歴史』(2) 鶴見良行他 (訳)。東京：井村文化事業者。)
- Constantino, Renato; and Constantino, Letizia R. 1978. *The Philippines: The Continuing Past*. Quezon City: The Foundation of Nationalist Studies. (コンスタンティノー、レナト; コンスタンティノー、レティシア R. 1979. 『フィリピン民衆の歴史』(3) 鶴見良行他 (訳)。東京：井村文化事業者。)
- Denton, Virginia Lantz. 1993. *Booker T. Washington and the Adult Education Movement*. Gainesville: University Press of Florida.
- Disini, A. F. 2002. The Story of Lepanto. Speech delivered at the 50th Anniversary and Alumni Homecoming of the Lepanto High School (May 1).
- Dobbels, Jerome. 1983. *Historical Sketch of the Mission of Mankayan, Benguet Prov.* Quezon City: CICM Archives.
- Finin, Gerard A. 2005. *The Making of the Igorot*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Fry, Howard T. 1983. *A History of Mountain Province*. Quezon City: New Day Publishers.
- Habana, Olivia M. 2001. Gold Mining in Benguet 1900-1941. *Philippine Studies* 49(1): 3-41.
- Halsema, James J. 1988. *Bishop Brent's Baguio School*. Baguio City: Brent School Inc.

- Hartendorp, A. V. H. 1967. *The Japanese Occupation of the Philippines*. Manila: MDB Printing.
- Ileto, Reynaldo C. 2001. Orientalism and the Study of Philippine Politics. *Philippine Political Science Journal* 22(45): 1-32. (イレート, レイナルド C. 2004. 「オリエンタリズムとフィリピン政治研究」永野善子 (訳) 『フィリピン歴史研究と植民地言説』永野善子 (編・監訳). 東京: めこん.)
- Jenista, Frank L. 1987. *The White Apos*. Quezon City: New Day Publishers.
- Karnow, Stanley. 1989. *In Our Image*. New York: Ballantine Books.
- Kerkvliet, Benedict J. 1977. *The Huk Rebellion*. California: University of California Press.
- Lande, Carl. 2002. Political Clientelism, Developmentalism and Postcolonial Theory: A Reply to Ileto. *Philippine Political Science Journal* 23(46): 119-128.
- Lopez, Salvador P. 1992. *Isles of the Gold*. Singapore: Oxford University Press.
- Malay, Armando. 1967. *Occupied Philippines*. Manila: Filipiniana Book Guild.
- Marines, Bonifacio; and Marines, Caroline. 2010. *The 66th Infantry and the Igorot Diary*. Pennsylvania: Infinity.
- May, Glenn. 1987. *A Past Recovered*. Quezon City: New Day Publishers.
- . 1996. *Inventing a Hero*. Madison: University of Wisconsin Center for Southeast Asian Studies.
- McCoy, Alfred W. 1980. Politics by Other Means. In *Southeast Asia under Japanese Occupation*, edited by Alfred McCoy, pp. 191-245. Southeast Asia Studies Monograph Series, no. 22. New Haven: Yale University.
- Medina, Carlos R. 2004. *Missionaries and Development*. Baguio City: A Research Project of the Saint Louis University Cordillera Research and Development Foundation, Inc.
- Miller, Stuart C. 1982. "Benevolent Assimilation": *The American Conquest of the Philippines, 1899-1903*. New Haven: Yale University Press.
- Ogawa, Tetsuro. 1972. *Terraced Hill: A Japanese Memoir of Defeat and Death in Northern Luzon, Philippines*. Rutland and Tokyo: Tuttle.
- Rafael, Vicente. 2000. *White Love and Other Events in Filipino History*. Durham and London: Duke University Press. (第1章前半部の邦訳, ラファエル, ビセンテ, 2004. 「白人の愛」辰巳頼子 (訳). 『フィリピン歴史研究と植民地言説』永野善子 (編・監訳). 東京: めこん.)
- Reid, Anthony; and Oki, Akira, eds. 1986. *The Japanese Experience in Indonesia: Selected Memoirs of 1942-1945*. Monographs in International Studies Southeast Asia Series, no. 72. Athens: Ohio University, Center for International Studies, Center for Southeast Asian Studies.
- Salamanca, Bonifacio. 1968. *The Filipino Reactions to American Rule 1901-1913*. Hamden: Shoe String Press.
- Saulo, Alfredo. 1991. *Let George Do It*. Quezon City: University of the Philippines.
- Scott, William H. 1986. *Ilocano Responses to American Aggression 1900-1901*. Quezon City: New Days Publishers.
- Sidel, John. 2002. Response to Ileto: Or, I Am Not an Orientalist? *Philippine Political Science Journal* 23(46): 129-138.
- Steinberg, David J. 1967. *Philippine Collaboration in World War II*. Quezon City: Solidaridad Publishing House.
- Sullivan, Rodney J. 1991. *Exemplar of Americanism: The Philippine Career of Dean C. Worcester*. Michigan Papers on South and Southeast Asia, no. 36. Ann Arbor: Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan.
- Volckman, Russell W. 1954. *We Remained*. New York: W. W. Norton and Company Inc.
- Wilson, Laurence L. 1965. *The Skyland of the Philippines*. Baguio City: Bookman, Inc.
- Wirkus, Lydia W. 1974. History of the Mining Industry in the Philippines: 1898-1941. Ph. D. dissertation, Cornell University.
- Worcester, Dean C. 1921. *The Philippines Past and Present*. 2 vols. New York: The MacMillan Company.
- 安達宏昭. 2002. 『戦前期日本と東南アジア』東京: 吉川弘文館.
- 荒 哲. 1999. 「フィリピンのリカルテ将軍に関する一考察」『国際政治』120: 210-229.

- 藤原帰一；永野善子（編）. 2011. 『アメリカの影のもとで』東京：法政大学出版局.
- 早瀬晋三. 1989. 『「ベンゲット移民」の虚像と実像』東京：同文館.
- . 1996. 『「ダバオ国」の在留邦人』『日本占領下のフィリピン』池端雪浦（編），291-332 ページ所収. 東京：岩波書店.
- . 2003. 『海域イスラーム社会の歴史』東京：岩波書店.
- .（編）. 2009. 『フィリピン関係文献目録』東京：龍溪書舎.
- 平岡善雄. 1974. 「最後のバランス・シートなどなど」『三井金属修史論叢 別冊 1 号 マンカヤン特集』三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局（編），385-397 ページ所収.
- 堀田正一. 1994. 「鉱山開発の現場から」『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』日本のフィリピン占領に関する資料フォーラム（編），357-419 ページ所収. 東京：龍溪書舎.
- 池端雪浦. 1975. 「フィリピンにおける日本軍政の一考察」『アジア研究』22(2): 44-74.
- . 1996a. 「鉱山開発と現地社会の抵抗」『日本占領下のフィリピン』池端雪浦（編），145-183 ページ所収. 東京：岩波書店.
- .（編）. 1996b. 『日本占領下のフィリピン』東京：岩波書店.
- イレート，レイナルド C.；ラファエル，ビセンテ L.；キブイエン，フロロ C. 2004. 『フィリピン歴史研究と植民地言説』永野善子（編・監訳）. 東京：めこん.
- 石原廣一郎. 1956. 『創業 35 年を回顧して』石原産業株式会社社史編纂委員会.
- ホセ，リカルド. T. 1993. 「たわめども折れず」永井 均（訳）. 『近代日本と植民地』（7）大江志乃夫他（編），81-103 ページ所収. 東京：岩波書店.
- 川島 緑. 1996. 「『モロ族』統治とムスリム社会の亀裂」『日本占領下のフィリピン』池端雪浦（編），103-144 ページ所収. 東京：岩波書店.
- 小林英夫. 1997. 「占領期東南アジアの日本企業の経営実態」『東南アジア史のなかの日本占領』倉沢愛子（編），110-130 ページ所収. 東京：早稲田大学出版局.
- 倉沢愛子. 1992. 『日本占領下のジャワ農村の変容』東京：草思社.
- .（編）. 1997. 『東南アジア史のなかの日本占領』東京：早稲田大学出版局.
- 栗田英幸. 2005. 『グローバルネットワーク』京都：晃洋書房.
- 三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局（編）. 1974. 『三井金属修史論叢 別冊 1 号 マンカヤン特集』
- . 1976. 『三井金属修史論叢 別冊 2 号 ボードウィン特集』
- 三井鉱山株式会社（編）. 1990. 『男たちの世紀』三井鉱山株式会社.
- 永野善子. 2000. 『歴史と英雄』東京：御茶の水書房.
- . 2001. 「アメリカ植民地国家とフィリピン国民の創造 —— 『1903 年センサス』にみる」『商経論叢』（神奈川大学）36(3): 139-151.
- . 2003. 『フィリピン銀行史研究』東京：御茶の水書房.
- 中野 聡. 1989. 「フィリピンの対日協力者問題とアメリカ合衆国」『歴史学研究』600: 57-67.
- . 2007. 『歴史経験としてのアメリカ帝国』東京：岩波書店.
- 並河栄治郎. 1972. 『南方鉱山とともに 50 年』東京：アグネ.
- 日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム（編）. 1994. 『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』東京：龍溪書舎.
- 岡田泰平. 2009. 「他者としてのフィリピン人の形成」『歴史評論』707: 63-78.
- 尾本信平. 1982. 『尾本紀行』私家版.
- 尾崎義道. 1974. 「比島苦楽のかずかず」『三井金属修史論叢 別冊 1 号 マンカヤン特集』三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局（編），361-383 ページ所収.
- 指方 実. 1974. 「マンカヤン労務から在留邦人誘導まで」『三井金属修史論叢 別冊 1 号 マンカヤン特集』三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局（編），399-406 ページ所収.
- 芹澤隆道. 2006. 「書評論文 アメリカから解放された歴史叙述に向けて」『クアドランテ』8: 255-277.
- 鈴木邦夫；花井俊介. 1995. 「三井系企業の進出」『南方共栄圏』疋田康行（編），373-415 ページ所収. 東京：多賀出版.
- 高井秀夫. 1974. 「あの選鉱場を放棄して」『三井金属修史論叢 別冊 1 号 マンカヤン特集』三井金属鉱業株式会社修史委員会事務局（編），235-285 ページ所収.
- 拓務省拓務局南洋課（編）. 1940. 『比律賓に於る鉱物資源』財団法人比律賓協会.

- 寺見元恵. 1996. 「日本軍に夢をかけた人々」『日本占領下のフィリピン』池端雪浦（編）, 59-101 ページ所収. 東京：岩波書店.
- 上田敏明. 1990. 『聞き書きフィリピン占領』東京：勁草書房.
- 宇都宮直賢. 1981. 『南十字星を望みつつ』私家版.
- 渡集団報道部（編）. 1996. 『第十四軍軍宣伝班 宣伝工作資料集 第一巻』東京：龍溪書舎.

政府刊行物・新聞

Baguio Bulletin (BB). 1930-41.

Philippines, Commonwealth of the Philippines Department of Agriculture and Commerce. 1940. *The Mineral Resources of the Philippines for the Years 1934-1938: Part2-Base Metals and Nonmetallics (MRPYと本文で表記)*.

United States, United States Bureau of the Census. 1905. *Census of the Philippine Islands: 1903*, Vol. 1.